

子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)

論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Association between maternal ritodrine hydrochloride administration during pregnancy and childhood wheezing up to three years of age: The Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

妊娠中の塩酸リトドリン投与と生まれた子どもの3歳時点の喘鳴との関連

ユニットセンター(UC)等名: 福島ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Pediatric Allergy and Immunology

年: 2021 DOI: 10.1111/pai.13545.

筆頭著者名: 村田 強志

所属 UC 名: 福島ユニットセンター

目的:

切迫早産は37週未満に子宮収縮が規則的かつ頻回に起こり、赤ちゃんが産まれそうな状態です。子宮収縮を抑えるための塩酸リトドリンの投与が、生まれた子どもにどのように影響するかは明らかでなく、本研究では、妊娠中の塩酸リトドリン投与と生まれた子どもの3歳時点の喘鳴(ひゅーひゅーする呼吸)の関連を調べました。

方法:

エコチル調査に参加した妊婦及び生まれた子どものデータから、妊娠中の塩酸リトドリン使用と生まれた子どもの3歳時点での喘鳴の頻度および喘息と診断された頻度との関連について統計解析を行いました。この統計解析では、妊婦の年齢や体格に加え、喫煙の有無や学歴、収入といった社会的な背景因子、さらには生まれた子どもの喘鳴に大きく影響する、子どもの周囲の環境の背景因子を調整しました。

結果:

68,123人の妊婦について、妊娠中の塩酸リトドリンの投与の有無で、2つのグループに分けました。塩酸リトドリンの投与がなかった妊婦と比較した場合、塩酸リトドリンの投与があった妊婦では、生まれた子どもが3歳時点で約1.2倍喘鳴を起こしやすかったという結果となりました。一方、塩酸リトドリンの投与があった妊婦で、生まれた子どもが3歳時点で喘息の診断を受けた頻度は、塩酸リトドリンの投与がなかった妊婦と比較して大きな差はありませんでした。

考察(研究の限界を含める):

塩酸リトドリンは古くから切迫早産の治療薬として使用され、日本の低い早産率に寄与してきました。本研究において、塩酸リトドリンの投与があった妊婦は、生まれた子どもが3歳時点で喘鳴を生じた頻度が多いという結果が得られました。しかし、本研究では、子どもの喘鳴の判断や喘息の診断が難しいこと、妊娠中の塩酸リトドリンの投与量、投与期間、投与方法が不明であること、切迫早産の重症度やその他の使用薬剤など、一部の妊婦の健康状態等が把握できていないこと等の限界点もあります。妊娠中の塩酸リトドリンの投与量や詳しい切迫早産の症状などを把握したさらなる研究が必要です。

結論:

妊娠中の塩酸リトドリンの使用と生まれた子どもの3歳時点の喘鳴の増加には関連がみられました。しかし、本研究の結果には限界点もあるので、注意深い解釈が必要です。妊娠中の塩酸リトドリンの投与と生まれた子どもの健康影響に関しては、さらなる研究が望まれます。